「兵役拒否・平和主義・エキュメニズム」研究会

政教分離と国家主義の残存
—D.C. ホルトムの視点から

原　真由美

1. はじめに

太平洋戦争敗戦後のGHQ/SCAPの数々の施策は、日本の戦後の出発点になっている。この施策にアメリカのバプテスト派宣教師ホルトムの研究は、深く関わっており、GHQ/SCAPの日本政策に影響を与えた。この施策の根幹の一つ「神道指令」は、戦後の民主化に繋がる一ステップとなっている。ホルトムは、アメリカ人でキリスト教バプテスト派の宣教師であると共に、日本の宗教、神道研究としての第一人者であった。

ホルトムが日本に到着したのは、日本が国家主義を標榜しはじめ韓国が併合された年であった。来日早々、見聞きしたのは当時の日本人の内面的精神に神道が深く影響を及ぼしていることであり、それに疑問を抱き探求する必要を感じたことから、研究に着手する。

結論から言えば、敗戦後から半世紀以上も経ているが、GHQ/SCAPの施策は、日本を国として統一しておかねばと言う命題のために不充分なものになってしまったと思える。日本人の精神的内面にまで及ぶ心の変換にまで入り込めず、個人の自由と人権を擁護することが民主主義の第一義とはならなかった点にある。人権と言えば、身勝手と同一語と捉えられてしまう側面がある。ホルトムが日本の戦後の歩みを危惧し、日本に寄稿した文書からは個人の内面にまで変化は及ばなかったことが指摘されている。このため今日でも国土、国難という概念から、国家主義の亜流と思われる論調も現れ、日本を国として統一するために温存され皇族の人権という言葉から天皇制の利用さえ行われていることも認識する必要があると考える。

本研究ではアメリカのバプテスト派宣教師ホルトム（D.C .Holtom）の日本研究から見た日本の「国家主義」に対する敗戦後の経緯について検証してみたい。

本研究は、おもにカリフォルニア、クレアモント大学の貴重図書のホルトムコレクション一次資料から、エキュメニカルな雑誌クリスチャン・センチュリーの

（Holtom　Japanese Christianity and　Shinto Nationalism シリーズ）とアメリカ政府機関の（AMERICAN COUNCIL, INSTITUTE OF PACIFIC RELATIONS）Far Eastern Survey を中心に考察する。

2. 宣教師ホルトムの背景

（1）前回の発表では、ホルトムの経歴で論じたと思うが「神道指令」による信教の自由を生んだ背景の経緯を振り返ってみる。

アメリカに入植したキリスト教徒には、多様性が見られるが、バプテスト派等では、信教の自由と政教分離という命題は共通であった。最も特徴的なのはニューイングランド地方のマサチューセッツ湾植民地のバプテストであった。少数派であったが、新生児洗礼を否定し自らの信仰に基づいた礼拝を主張したため行政当局から迫害を受けている。自覚的信仰告白を重要視しており個人の内面的なものを重要視しており、これが個人の基軸になっている。

アメリカ建国に大きな影響を与えたバプテスト派のロジャー・ウィリアムズ（Roger Williams,1603-1683）はロンドンに生まれ、1630年頃アメリカに移住する。1631年マサチューセッツで牧師をしていたが信教の自由と政教分離を巡ってマサチューセッツ湾植民地（政府）と衝突し、植民地退去を命じられるが、1644年に信教の自由と政教分離の擁護を訴える「良心の大義擁護のため、血なまぐさい迫害の担い手を論ずる *The Bloudy Tenent of Persecution for Cause of Conscience Discussed* で信教の自由を核とした基本的人権を論じ当時キリスト者から「悪魔の使い」とされたアメリカ先住民にも認めている。個人の内面に起因する事柄にたいして市民個個人の宗教生活に対して公権力が介入することの不当性を説き、信教の自由を論ずる古典として合衆国憲法制定とアメリカ建国に大きな影響を与えている。

『見えてくるバプテストの歴史』丸善株式会社　2011年　118,120頁。

独立革命期には、どこの国家勢力にも加担せず新約聖書の求める絶対平和を実践しようとしたクウェカー教徒、メノナイト教徒の人々は、徴兵に代わる重税を（双方）から課せられた。ペンシルヴァニアでは逃亡してきたイギリス兵を助けたかどで投獄されたクウェカー教徒もいたが、ワシントン将軍は、かれらの訴えを受け、懲役期間や税額を減免する措置を取っている。アメリカの建国以来の歴史のなかでは、幾つかの例の中には「アメリカ国」と「キリスト教」を同一視する傾向が

あったが、一方、同一視しない信仰の群れがあったことも伝えている。彼らにとって信教の自由は、良心的兵役拒否の自由をも含んでいた。

森本あんり『アメリカ・キリスト教史』信教出版社　2013年　67頁。

（注）ホルトムについての説明：前回の発表時メモに記載してあるので参照して頂きたい。

バプテスト派の宣教師。日本の神道研究家。太平洋戦争が勃発しホルトムも1941年の第一次交換船でアメリカに帰国していたが、アメリカ民間研究機関の太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）IPRの研究員となっている。

IPRでは1943年にカリフォルニア、パサデナ短期大学のIPR研究会で発表した『日本人の内面性』（Inside the Japanese mind）から随時参照している。

IPRは、日本について意見の集約をしている。ホルトムはIPRの調査会の機関誌「Far Eastern Survey」にも寄稿しているが、シカゴに拠点を置く進歩的でエキュメニカルな1884年に創刊されたクリスチャン・センチュリー誌にも「Japanese Christianity and Shinto Nationalism」をシリーズで寄稿している。この機関誌は一般のクリスチャンを読者に批判的に考え、キリスト教の信仰に生きることの意味を探る雑誌として知られていた。

（2）ホルトムの研究に見る日本の国家主義

太平洋戦争中、アメリカの最高司令官であるマッカーサーは善戦を重ねていた日本軍のことを軍隊ではなく、熱狂者と闘っていると言い表していた。何が彼らを熱狂者にしたのか、そして何について熱狂的なのか。彼らの人種的に侮辱されたという被害妄想が積み重なり、その導火線に火がついたととらえていた。*The Christian Century,* January 14, 1942, 35, 36.

太平洋戦争が勃発しホルトムも1941年の第一次交換船でアメリカに帰国していた。1922年にシカゴ大学で『近代神道の政治哲学、日本の国家政策』についての論文で博士号を取得しており、太平洋戦争の時勢からホルトムの研究は注目されていた。

1943年にカリフォルニア、パサデナ大学の研究会で戦争中の敵である日本について日本人の内面性についての研究発表を行っている。

日本人の内面性（Inside the Japanese mind）では、日本は、欧米諸国（特にアメリカ）から海に隔たられ、地理的に離れていることから欧米諸国は、日本の国についての十分な情報もない。その隔たった距離から経済的、軍事的情報は得られていなかった。同じ様に日本も米欧諸国の十分な情報が得られなかった。しかし、日本人の内面性は、そのた　め大きく異なって醸造され、異なった方向になっていた。日露戦争に勝利し、欧米からも注目を集めた日本人の勝利の要因は日本

人の熱狂性にあると考えられていた。

この時のホルトムの発表は、次の様であった。

現在の太平洋戦争で敵として戦っている日本人を理解するためには日本人がある状況でどのように考え、行動をするのか、その予測なしに勝利することは困難である。日本人の特徴を一言で表すとすると原始性である。原始的古代的な性質が現代にも残っており、日本人全体の国民的な特性を一言で分かりやすく表すと原始性（古代性）と言える。

その理由としては、本当の文明というものは協同の経験や世紀を通じ世代を通じて実現するもので真実の文明人としてどこでも尊敬されるが、日本人の場合はそこに達していない。

ホルトムは、原始性（古代性）と言う言葉を使っているが、生まれて土着したままの状態を現している。その理由は、本当の文明というものは協同の経験を何世紀もかけて世代を通じて実現できるもので、そこに真の世界主義人が生まれ、互いにどこでも尊敬される者となるが、日本人の場合そこに達していないということである。その残忍とも言える特徴は、長い期間を通じて個人そして社会から特別に孤立した状況にあったことから生まれ、日本人は、制度として、ある意味、性格の個性として、強力な生きる力として保たれてきたという傾向がある。ホルトムは、隔離されていた日本では、人々のその生きる力・人種主義性を3つの方法で保ってきたと論じている。

①日本人の原始性の特徴は、隔たった地勢による欧米諸国からの重要な政治的孤立があった。
②地理的な孤立というものが何百年にもわたって海によって閉ざされていた。
③社会的な孤立を生むことで、それが大きな影響となった。

260年間、徳川が厳しい鎖国政策をとり、オランダ・韓国等3ヶ国程度を除き、他の国々と通常の関係から切り離されていたため日本は亀のように自分自身を守ろうとした。そして人々の心は古い習慣を鋳型として維持し続け、それが外の広い世界と人々、他の国々との交渉もせず亀のように首を引っ込めていたという間違いになっていた。これは日本人の心理にとてつもなく大きな影響を及ぼしている。

このような土壌から生まれた近代政府（明治政府）は、排外主義を醸成しやすく白人に嫉妬や憎しみまでも持つようになっていった。普遍的な世界の影響は、人々の内面的な魂も道を大きく開いているはずであったが、孤立して存在していたため、その危機は、国家的政治だけでなく、人々を原始的な排他主義の古い慣習の道へと容易に戻ってしまうことは、簡単であった。

(3) 日本人の原始性（古代性）な性質

ホルトムは、この原始性は、日本人の思考や行為にどのように現れるのか。4つの例で示している。

1）誇張された人種的な優越性とその自負

文化移入がされていない地域の人々ほど自らの唯一性や優越性を誇りがちであるという指摘である。野蛮という言葉は、自国民だけを人間だとみなす人々のことで、文明人と自らを言っている人々にこのような民族的俗物根性の原始性が残っており存在していた。

このような原始な内面性を持った民族的に固定化してしまった国民は、時として文化的に遅れているとされる他の国の人々よりも自分たちだけが優れているとする集団心理が生まれ、このことは、日本人の最も特徴的な性格となっている。

第一次世界大戦前に日本の近代日本作家の一人によって著述された表現の中に、日本人は日本人らしく行動し、その信じることのために生きも死にもするという「日本精神」の見解が示されている。

2）生産的な努力よりも略奪活動への依存性が特徴。

軍隊への賛美と剣による支配を生んでいることは、日本のみならず近代戦争の勝利は生産的な行為を生むことよりも、他の人達の労働の実りを力によって奪い取ることを強く確信させていった。それ故、日本の兵士は社会的にも高位に位置付けられていた。

朝鮮、中国、南方諸島への進出は、日本の生命線という背景を生んでいた。

3）日本人の権威に対する考えへの影響

個人の責任ではなく、集団支配者の権威に寄りかかる慣習があった。寄らば大樹の陰である。権威への宣誓という慣習の意味を持っている。個人の責任という感覚の欠如は良心を弱らせることであり、他の人を思いやるという感情の欠如が生じた。標準に合わせること（標準化）が最も重要であり、そ

れが面目であった。その標準化による面目は偽善と関係すると言える。

4）死に対する態度

死は格好の良いものではない。日本兵は降伏するかという問いに、降伏は恥という言葉が立ち塞がる。ホルトムは、日本人が残虐性を持っているかの問いについて、自らの持っている生き方に対する振る舞いがあったと見ていた。ゆっくりと個人に醸造されたこの原始性を根絶するには、かかったのと同じくらいの時間が必要となるだろう。

歴史上での戦争捕虜の扱いを見ると、16世紀末に京都の耳塚に韓国人と中国人捕虜30,000の耳が埋められているという。中世の戦では、兜首を取ることが日常であった。首狩りの風習が残存していたのだろうか。ホルトムは、太平洋戦争という近代戦が始まる以前に、日本人の死に対する態度と残虐性を聞いている。

おそらく今日では、地球上にこのような日本人のような心理的、組織的性格の緊張と問題をはらむ国はどこにもないであろう。激しく孤立した自民族主義は、突然やって来た西洋文明に大きく揺さぶられ、以前からあった原始的とも呼べる内面的均衡を保つために内にこもる対立傾向へと日本人の心を向け精神の病を悪化させていった。

日本のこれまで類を見ない成果のほとんどは国家的な脅迫観念からであったと言える。国家的な精神的な忠誠心と愛国主義は他の国への優越性を誇張するための脅しではなく、それは善なる運命と結びつき、その運命の計画実行組織として軍隊が位置づけられてしまった。日本人と外国人が同様の背景を持っていれば、そのような考えには陥らないであろう。

（4）ホルトムの見た日本のキリスト教

1）明治維新後の日本人指導者層の志向には、和魂洋才がありキリスト教も洋才の一つとして取り入れたが、実態は、日本政府がキリスト教を外国との不平等条約の改正を狙った環境条件の一つとしたい目的からキリスト教にもある程度の寛容さをもって許容したという状況があった。

2）日本の教会は、キリスト教の宣教地における教会の政治形態について外国ミッションから独立し自立した日本のキリスト教会を創ろうとする傾向に向かってしまった。明治維新後にキリスト教を受け入れた日本の指導者層は、明治政府に登用された武士階級を除き、その立身出世主義に乗れなかった武士階

級もいた。克己心の道をキリスト教に求め、キリスト教の思考形態にも武士階級という旧来の国体観を持ち続けていた。日本の指導者層には、もともと日本統治を明治維新の国家主義観をもって行おうとする方向性があった。

3）日本人の資質として日本の旧来の大家族主義に根差す封建思想、社会構造や社会制度による依存的・隷属的体質が残っているという事実もあった。外国ミッションはキリスト教を宣教することで個人の自覚的、主体的な思考が加わっていくと見ていたが、旧来の国体観から抜け出すことが出来ず日本人の思考に内在していた思考形態からキリスト教が独自解釈されるなど、この国家主義観が日本のキリスト教に影響を及ぼし外国ミッションから自主・独立しようとする強い傾向を生んでいる。

3. 日本人の国家主義観の残存

ホルトムの日本を論じた資料からは、敗戦後の日本における状況について、前述の歴史感を踏まえた捉え方を基準にして論じている。そこには敗戦後の日本の方向性を見る上で重要な幾つかのポイントがありGHQ／SCAPの施策により改善されたはずであったが、その施策の不徹底さにより未だ改善されず残った問題が指摘されていた。一つは民主主義に対する理念の確立であった。アメリカの不充分な施策は、日本に問題点を残してしまった。

（1）民主主義と国家神道

アメリカのGHQ／SCAPは太平洋戦争が起こった起因を、日本の古代から天照大神につながる天皇を中心とした国家主義的な体制によるものと見ていた。この体制こそ日本人の精神的背景となった国家神道であった。

ホルトムが来日した1910年は日本が朝鮮半島を侵略し韓国を併合、国家主義の基に軍国主義へと突き進む時代であった。昭和初期はとりわけ日本が外国からの自立や影響力を排除するための対外政策をとっていたことを感じ、日本人の精神的要因と根源が、超国家主義、国家神道であることを究明していった。

国家神道は日本の精神構造に深く根を下ろし、その精神構造が国家主義、軍国主義を生み出した太平洋戦争に至った要因と見たことから、民間宗教としての神社神道を区別し、その存続を支持しつつも国家と神道との完全な分離、政教分離を徹底することが必要としてCHQ/SCAPは施策を進めた。そして国家から国家神道を分離するため1945年12月15日に「神道指令」を発令し日本に信教の自由

の柱を立てようと施策を実施したが、日本人の内面にまで入ることはできなかった。

聖公会の熱心な信者であったGHQ最高司令官のマッカーサーは、敗戦によって虚脱状態であった日本人を精神的に再建するには日本がキリスト教国になることだと考え、日本へのキリスト教の伝道に並々ならない関心を抱いていた。

(2) 民主主義の現在

ホルトムは、1947年版の『日本と天皇と神道』の補完文書で、国家とキリスト教は、一つではないと考えていることを示している。今、国という概念（国土）から戦争が出来る国としたいと言う芽が出てきている。現在の戦争では、大義が叫ばれる戦争となっており、大義のために戦争を行うという理由付けである。

1）民主主義の旗印

現在の例を挙げれば、アメリカの例がある。アフガニスタン・イラク・シリアに民主主義国家を作ると言う大義が掲げられ、その旗の基に、フェミニストと呼ばれる階層さえも戦争を積極的に支持していたが、撤退も含め矛盾が生じたことは自明のことであった。

2）国（国土）を守ると言う大義

太平洋戦争中からアメリカでは、共産主義（アカ）アレルギーという差別が生まれ、それが浸透して、戦後80年近くなった今も生き続けている。ドミノ理論というものがあり、これは、一国が共産主義化すると隣接する国々も共産化するということをアメリカは警戒していた。

日本においても、戦争中から社会主義者＝悪者の構図が案外浸透していて、現在までもこの意識が生き続けている理由は、数々あると思うが、政府の情報を鵜呑みにし、信じてしまうと言う日本人の特性とも言うべき資質も一因であると思う。

民主主義という言葉が、大多数者の利益が優先されるという言葉に置き換わってしまい、狭義に解釈すれば国益中心になる。この矛盾は、日本の基地問題との関連性も考えられる。

3）家族を守るという旗印

特に女性について言えば、旧来の女大学の残存があり、控えめで従順が美徳意識として残った。結婚しなければ1人前でないという意識の残りと、男の役割意識の蔓延とそれを許す土壌があった。

4. まとめ

日本の積み残した課題への評価は、ホルトムが1947年に指摘していた問題にもあったが、戦後80年になろうとする今でも、日本人個人の精神的内面にまで入り込めず、変化が及ばなかったことが判る。内面の原始性から解放されているかの命題から抜け出せずいる。また、GHQ／SCAPの政教分離政策についても、アメリカが太平洋戦争後に起きた冷戦のために日本統治の政策としての積み残しが生じ、「神道指令」にも不徹底さがあり、国家主義の残存を許してしまった。かつての日本で国家神道に対して忠誠を示すことが「善い日本人」の要件であったが、この国家主義は日本人が他の世界宗教に携わろうと時にも組織的、構造的勢力として一人ひとりの精神状態や行為を支配する古い典型が令和の新しい時代にも残されていることを警戒し今再認識する必要があると考える。

ホルトムが日本の戦後の歩みを危惧し、日本に寄稿した文書でも指摘しているが、日本における民主主義の発展と、男女の同権がどの程度成熟したかについて普遍的に世界で評価されることが日本の評価に繋がるという一つの指摘であったが、それが普遍的な世界精神が息づくかどうかの指標となると見られたからである。

民主主義を考えるには、個人の自由と人権を擁護することが民主主義の第一義であり、その保障と擁護が必須である。自己責任は、その条件の中で論じられることだろう。未だ日本人は標準化にとらわれ権威に服従することで他者を思いやる感情が欠如しているのだろうか。

有事に揺さぶられた際に、国土、国難という概念から、精神的均衡を保つために国家的忠誠心と愛国主義が結びつき日本人にとってその遂行のために軍隊がいつ何時正当化されるともかぎらない。